The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	記憶力と自我 : ベルクソンの『物質と記憶力』における「生きられる時間」と「純粋持続」について
Author(s)	伊藤, 淑子
Citation	メタフュシカ. 1999, 30, p. 85-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66620
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

記憶力と自我

――ベルクソンの『物質と記憶力』における「生きられる時間」と「純粋持続」について――

伊藤淑子

1　はじめに

ベルクソンは『意識の直接与件についての試論』で真の時間とは「純粋持続」だとして、純粋持続をきわめて明晰に示したのであるが、「自我」についてはその内容が曖昧であると思われる。ベルクソンは自我に二様態を区別した。意識事実は、「質的時間」において考えられるか「量的時間」において考えられるかに応じて、相互浸透の状態か判明な区別のある状態として現れる。またベルクソンは「深い自我（又は内的自我）」と「表面的自我」を区別した。深い自我は力動的で不可分な進行の状態にあるが、表面的自我は相互外在的状態である。従って「自我の二様態」とは深い自我と表面的自我のことであり、それは同時に純粋持続と同質的時間の区別を意味することになる。ところで深い自我と表面的自我は一つの自我の二つの側面であるのだが、ということは、一つの自我には純粋持続と同質的時間が同時に存在していることになる。これはどういうことなのだろうか。ところが他方で、自由行為とは内的自我の外部への現れだと言われ、この場合表面的自我は破壊される。そうなると二つの自我は一つの自我の二面性ではなく、主体によって二者択一されるべき二つの自我ということになるのではないか。その場合、純粋持続を生きている主体は内的自我を生きており、同質的時間を生きている主体は外的自我を生きていることになり、内的自我と外的自我は別の自我だということになる。しかしそうなると、「深い自我」と「表面的自我」という区別は成立しなくなる。だが我々はここで、自由行為とは「純粋持続に身を置き直すこと」だと言われていたのを思い出さなければならない。つまり外的自我においては、同質的時間の背後に純粋持続は存在しているのである。換言すれば、外的自我においてはやはり「深い自我」と「表面的自我」の区別はあること

になる。では外的自我における「深い自我」と「表面的自我」の違いは何か、又自由行為における「純粋持続」と外的自我における「純粋持続」はどう違うのか、そして外的自我から自由行為の主体である内的自我にはどのようにしていくことができるのか。このような疑問に答えようとするなら、意識を「直接的所与」の立場からでなく、「日常的行動」の立場から具体的に考察しなければならない。それを行っているのが『物質と記憶力』である。我々は『物質と記憶力』を「自我論」として読むことによって、具体的な自我の構造を明らかにし、現実に生きられる時間と純粋持続がどのような関係にあるのかを明らかにしたい。

2　知覚と身体

『試論』で明らかにされたように、純粋持続は表面では外界に触れているため同質的持続として展開され、「意識事実の相互浸透」は「明確な輪郭をもつ意識事実の継起」として展開されるようになる。この区別のある意識事実は『物質と記憶力』では「イマージュ」又は「表象」と言われる。また、純粋持続においては現在と過去の区別はないのだが、日常的意識の立場に立つ『物質と記憶力』では現在と過去ははっきりと区別される。現在のイマージュは「知覚」であり、過去のイマージュは「記憶(souvenir)」である。そして、知覚と記憶や記憶相互を結びつける働きをするのが「記憶力(mémoire)」である。こうして『試論』における「純粋持続」と「同質的時間」の対立が、『物質と記憶力』においては「記憶力」と「イマージュ」の対立に置き換えられることになる。では「記憶力」と「イマージュ」の関係はどうなっているのだろうか。『物質と記憶力』ではこれを身体の立場から考えることになる。行動の主体は身体であり、内的自我を外的自我に屈折させるのは身体だからである。

我々はベルクソンに倣って、まず「現在のイマージュ」つまり知覚について考えることにする。ベルクソンの基本的な考え方は「身体は行動の中心」(M.M.,p.14)であり、「身体は表象を生み出すことはできない」(ibid.)ということである。「脳の機能と脊椎系統の反射活動の間には、複雑さの相違があるだけで、本性の相違はない」(M.M.,p.25)からである。脳とは「中央電話局」(M.M.,p.26)のようなもので、通信を伝えたり待たせたりするが、受け取ったものに何も付け加えない。全ての知覚器官はその終点を脳まで伸ばし、脊椎と延髄の全ての運動機構が正規の代表を脳に置いているのだが、脳は受け取った運動に対しては分解の道具であり、遂行される運動に対しては選択の道具でしかない。動物種の系列を登るほど、神経系は行動が次第に必然的でなくなるように構成されているのだとすれば、神経

系の発達に従って発達する知覚もまた認識に向かうのではなく行動に向かうと考えられる。生物の神経系が行動の非決定性のためにできているのであれば、知覚の広さは後続する行動の非決定性を正確に表わしていると考えられよう。では知覚はどのようにして生ずるのだろうか。ベルクソンによれば物質とは「イマージュの全体」であり、物質の知覚とは「私の身体の可能的行動に関係づけられたイマージュ」である（M.M.,p.17）。では客観的実在として現存するイマージュが表象されたイマージュになるには、どうすればよいのか。現存するイマージュがそれ自身の何かを捨てればよいのである。物質についての我々の表象は、物体に働きかける我々の可能的行動の尺度なのだから、物質の表象は我々の欲求、一般的には我々の機能と関わりのないものの排除によって生じるからである。「意識的に知覚するとは選択することを意味する」（M.M.,p.48）のである。従って、イマージュにとってあることと、意識的に知覚されてあることの間には、本性の相違はないことになる。物質そのものと物質の知覚の関係は、全体と部分の関係だということになる。ただしここで言われている知覚は、具体的で現実に我々が経験する知覚ではない。具体的知覚には感情と記憶力という二つの主観的要素が含まれているが、ここで問題にしているのは主観的要素を捨象した「純粋知覚」である。これは事実上ではなく権利上存在する知覚なのだが、現実の知覚の非人格的基底をなしており、そこでは知覚と知覚される対象は一致している。我々は純粋知覚において物質に触れることになる。

今度は知覚に現実の姿を帰してみよう。我々の現実の知覚には感情（affection）が混ざっている。しかも「知覚と感情との間には本性の相違がある」（M.M.,p.56）。ヘッドライトは車の接近を知らせるが、間近で見ると目を眩惑する。しかし光の知覚から眩しさの感情への変化はある時点で行われる。知覚が外界の刺激を反射して対象を照らし出すのに対し、感情は刺激に抵抗しある程度それを吸収する。知覚は外的事物において成立するのに対し、感情は身体において成立する。知覚は外的事物に対する可能的ないし潜在的行動を描くのに対し、感情は身体の実在的行動を描く。従って感情は身体に局限され拡がりをもっている。身体が物質界のすべてのイマージュの中で特権的なイマージュであるのは、身体が行動を成し遂げ感情を経験するという二重の能力をもっているからである。身体の感覚—運動能力によって、私の知覚はイマージュの全体の中から私の身体を中心に徐々に自己を限定する。我々の知覚は純粋な状態では事物の一部をなしているのに対し、感情的感覚は身体に影響を及ぼす様々なイマージュの中で「自己の身体という特殊なイマージュが被らざるをえない必然的変化」（M.M.,p.67）を表わしている。

現実の知覚におけるもう一つの主観的要素は記憶力である。

我々の知覚はどんなに短くても一定の持続を占めている。多数の瞬間を互いに他へ延長し集約する記憶力の働きによって感覚的性質の主観性が生まれる。宇宙を次々に捉える我々の知覚の一つ一つがそれぞれ質を異にするのは、これらの知覚の各々がそれ自身持続のある厚みを占めて拡がっており、記憶力がそこにある莫大な数の振動を圧縮して、継起的な諸瞬間を全部一緒に我々に与えることから来る。知覚するということは、限りなく稀薄化された存在の莫大な諸期間を、より強い生命のより分化したいくつかの瞬間に凝縮することである。「知覚するということは不動化するということを意味している。」(M.M.,p.233) 物質の振動を感覚に固定することによって、我々は物質の必然性のリズムから自由になり、物質に働きかけることができるようになるのである。これは逆に言えば、記憶力を廃した純粋知覚においては、物質についての瞬間的な直接的ヴィジョンが獲得できるということである。物質は我々の延長的感覚が多数の瞬間に配分されればされるほど無数の振動に解消し、同質的になる。しかし『物質と記憶力』では、物質は同質的空間に完全には一致しないとされている。同質的空間は「固定と分割という二重の作業を抽象的な形で表わした」(M.M.,p.237) もの、物質の下に張りわたされた記号であるが、実際の物質は「ひろがり (extension)」つまり「具体的で不可分な延長」(M.M.,p.247) だからである。

ところで、記憶力はもう一つ知覚に不純物を混入する。過去のイマージュ、記憶である。実際記憶力とは刻々と過去となったイマージュを保存すると同時に、それを現在の知覚に絶えず混入する働きである。記憶力は次々と現在の経験を既得の経験によって豊かにしながら完成するのであり、既得の経験は絶えず増大していってついには現在の経験を覆い隠してしまうことになる。外界の実在と一致する直接的な直観である知覚は、実際には記憶力がそこに付け加えるものに比べて取るに足らないものになる。そうなると知覚は記憶を呼び起こす機会原因に過ぎなくなる。このように現実の我々の知覚には記憶が侵入しており、そのことによって我々は外的事物を我々にとって意味ある対象として認めることになる。こうして知覚と記憶は相互に浸透しあっているのだが、知覚と記憶の間には本性の違いがある。純粋知覚の本来の基本的な働きは、我々を一挙に諸事物の中に置くことである。純粋知覚を構成するのは、これらの事物の中で姿を現わす生まれかけの我々の行動である。言い換えれば「我々の知覚の現実性はその活動性、知覚を延長する運動にある」(M.M.,p.71)。それに対し記憶は過去に属する。過去とは観念であり、もはや働かないものである。従って「記憶力は原理上物質から完全に独立した力でなければならない」(M.M.,p.76) ことになる。記憶力の現象において我々は精神に接することになるのである。ということは、不在の対象の表象

である純粋記憶は、脳の作用から引き出すことができないということである。では記憶力とは、そして記憶とは何なのだろう。現実の知覚には必ず記憶が混入し、知覚とはほとんど常に再認であるのだが、再認はどのようにして生じるのかを明らかにすることによって、記憶と記憶力について考えることにしよう。

3　記憶力と精神

ベルクソンは過去の存続に二つの形態を区別している(M.M.,p.82)。過去は運動の形で、つまり「運動機構」として保存されるか、表象の形で、つまり「独立的記憶」として保存される。従って記憶力には二種類ある。「運動的記憶力」と「独立的記憶力」である。独立的記憶力とは、記憶力がその本性に従って持続のあらゆる瞬間に知覚を次々と蓄積していく、意識の独自の働きのことを言う。この記憶力は「我々の日常生活の全ての出来事をそれが展開するにつれて記憶心像の形で記録する」(M.M.,p.86)。それは「どんな些細なことも洩らさないで、一つ一つの事実や動作にその位置と日付を与える」(ibid.)。各々の記憶心像はそれ自体で絶対的に充足し、生ずるがままに存続し、相伴う全ての知覚とともに「私の歴史の還元不可能な一瞬」(M.M.,p.85)を構成する。従って個々の記憶は固有の輪郭、色彩、時間的な位置をもつ個性的なものであって、反復されえない。このようにひたすら過去を蓄積する自発的記憶力によって、既に経験された知覚の利用、再認が可能になる。しかし我々は過去の全ての記憶を意識しているわけではない。むしろ過去は我々から滑り去って、いつも我々から逃れようとする。そうすることによって我々は行動に向かい、未来を目指すことができるからである。過去の保存が自発的に行われるのに対し、過去の再認は精神の積極的な働きを要するのはこのためである。

知覚されたイマージュは一方では記憶力の中に定着しその一員となるのだが、他方では生まれようとする行動へと発展する。知覚に続く運動は有機体を変容し、身体のうちに行動への新たな態度を作り出す。こうして全く秩序が異なる経験が生じ、身体に沈殿する。これが運動機構である。運動機構は「同じ努力の反復」(M.M.,p.84)によって獲得される。運動的記憶力は過去から巧みに配列された運動だけを取り出すのであり、この運動は過去の蓄積した努力を現わしている。運動的記憶力の役割は過去の運動を利用することによってそれを互いに組織し、機構を設け、身体の習慣をつくり出すことである。この習慣が記憶であるのは、それを獲得したことを思い出すからであり、自発的記憶力に訴えるからである。従って、自発的記憶力こそ真の記憶力であり、運動的記憶力は「記憶力に照らされた習慣」(M.M.,p.89)である。ここにおいて過去は表象されるのではな

く、演じられることになる。この記憶力は「絶えず行動に向かい、現在に位置し、未来だけを見ている」(M.M.,p.86) のである。

ところで、記憶力が過去を保存するのは過去の経験を現在の行動のために利用するためである。では現在において過去を把握する行為、即ち再認とはどのような働きなのだろうか。記憶力に二つの形態があるのに対応して、再認にも二つの形態がある。運動によって実現される「自動的再認」又は「非注意的再認」と、記憶心像が介入する「注意的再認」である。自動的再認は極限において「瞬間における再認」(M.M.,p.100) である。それは記憶の介入を待たずに「身体だけでできる再認」、表象ではなく「行動における再認」である。あらゆる知覚は運動へと展開する。通常の対象を再認することは、とりわけそれを用いることができるということであるが、それは対象に適応する運動を素描することであり、対象に対し一定の態度をとることである。対象を用いる習慣はついには運動と知覚の全体を組織するに至るが、反射的に知覚に伴おうとするこの生まれつつある運動の意識が自動的再認なのである。通常の再認の感情は、このように、知覚に伴う組織的運動の意識のうちにその基礎を持っている。しかし多くの場合そこには別のものも加わっている。実際、身体によって次第にはっきりと分析される知覚の影響の下で、運動機構が形成されるのだが、それと同時にそれに先立つ心理的生活が、その出来事のあらゆる詳細と共に現存している。表象的記憶力は現在の実用的な意識によって、即ち知覚と行動をつなぐ神経系の感覚—運動の平衡によって絶えず制止されているけれども、現実的印象と随伴運動の間に亀裂が現れるのを待ち構えていてそこにイマージュを滑り込ませようとしている。しかしその場合、現実的知覚に類似したイマージュが選ばれなければならない。この選択を準備するのが、遂行された運動あるいは生まれかけの運動である。機械的再認を引き起こす運動は、イマージュによる再認を一方では妨げながら他方では容易にしている。注意的再認の基礎には自動的再認がある。

従って、注意的再認は二つの過程によって成り立っている。「自動的な感覚—運動過程」と「記憶心像の能動的な、言わば離心的な投影作用」である (M.M.,p.119)。注意的再認が成り立つには、一方で身体が対象を前にしてイマージュの喚起に適した態度を取らなければならず、他方で記憶自身が現実化して身体の中に適合点を見出し、行動へと発展しなければならない。注意的再認の第一段階である自動的な感覚—運動過程とは、知覚に随伴する自動的運動のことである。知覚は分節運動へと進展する傾向をもっている。知覚は反復されることで自己を分解し、主要な分節を示すことのできる生まれかけの運動を組織するが、そのことによって意識内には生まれかけの筋肉感覚が進

展する。これが「運動図式」(M.M.,p.121) である。換言すれば、運動図式とは知覚が自動的に模倣運動に解体することによって生じる機構、つまり知覚の顕著な特徴の内的反復によって生じる機構である。これは身体が外から来た刺激に直面して自動的に取る態度であると同時に、記憶の選択を媒介する的確な態度であり、知覚と思い出されるイマージュの共通の枠として役立つ。いわば運動図式は「空の容器」(M.M.,p.135) であって、そこに入り込む記憶の形を決定するのである。それは「意志的注意の前奏曲」(M.M.,p.128) であり、「意志と自動機構の境界」(ibid.) を現わしている。

では注意的再認の本質をなす「記憶心像の規則的介入」はどのようにしてなされるのだろうか。しかしその前に、過去とは何か、記憶とは何かを明らかにしなければならない。ベルクソンによれば、我々の過去は完全に保存されている。有機体に定着した習慣としての記憶力が現在において働くのに対し、この記憶力は決定的に過去において動く。ベルクソンはこれを「意識と同じ拡がりを持つ」(M.M.,p.168) 真の記憶力だと言う。しかしながら、我々の現実の生活においては、こうした過去は意識されない。それは、現実的意識が各瞬間に有益なものを受け入れ、無用なものは即刻退けるということからくる。我々はここで意識には二つの意味があることに注意しなければならない。自我と同じ拡がりを持つ存在としての意識と心理的な意識である。心理的意識は行動を統括し、選択に照明を与えるという働きをする。この場合意識は行動するものの特徴であり、従って行動しないものは意識であることをやめても存在することをやめるわけではない。過去が意識されないのは、過去が行動に役立たないからであって、だからこそ過去は無意識な状態で存在しているのである。ベルクソンにとって現在と過去の区別は有用と無用の区別と同義であり、有用と無用の区別が意識と無意識の区別を生み出すのである。従って無意識とは意識がないことではなく意識が力を持っていないことを意味する。つまり無意識的心理状態とは潜在的心理状態のことである。過去は本質的に潜在的なものなのである。この潜在的状態における過去のことをベルクソンは「純粋記憶」と言う。それは「拡がりをもたず、無力で、全く感覚に関与しない」(M.M.,p.156) 記憶のことである。

では注意的再認はどのようにして行われるのか。ベルクソンは「外的知覚が我々の側にその輪郭を描く運動を引き起こすならば、我々の記憶力は受け取った知覚に対し、それに似ていて、我々の運動がすでに素描した古いイマージュを差し向ける」(M.M.,p.110-111) と言う。つまり注意的再認は知覚の呼びかけと記憶力の応答によって成り立っている。知覚は運動図式に進展することによって記憶力に対し選択の領域を指示する。記憶力は一挙に過去一般に身を置き、知覚に類似した記憶を次々に

選んで知覚の方に投げ入れる。記憶は運動図式の中に自らはまり込むことによって知覚に覆い重なり、再認された知覚、判明な知覚が生み出される。このように、判明な知覚は外部の対象から来る「求心的流れ」と、純粋記憶を出発点とする「遠心的な流れ」の合流点において成り立つのであるが、再認の特徴をなす過程は記憶から知覚に進むのであって、求心的ではなく遠心的だとベルクソンは言う（M.M.p.146）。では遠心的過程とはどのようなものか。我々は記憶力の底から純粋記憶を選ぶのであるが、それは先に述べたように無力な観念に過ぎない。我々はこの観念を、運動図式にはまり込んで知覚と融合する力をもつ記憶心像へと展開する。そこには、観念の雲が判明な記憶心像へと凝縮していき、記憶心像はまだ流動的であるにせよ、ついには物質的な感覚と癒着して固まろうとする連続的な進行がある。純粋記憶は一層完全で、具体的で、意識的な表象の形を取れば取るほどますます知覚と融合しようとする。換言すれば、無力な純粋記憶は現在の感覚へと物質化することによって、そこから生命と力を借りることになる。こうして、純粋記憶が記憶心像に、記憶心像が判明な知覚にという再認過程、言い換えれば、「潜在的イマージュが潜在的感覚に、潜在的感覚が現実的運動に」（ibid.）という再認過程は、潜在的な記憶が現実化して知覚に変わる動的な進行である。「記憶の現実化」とは、記憶の有力化、現在化、意識化、感覚化、物質化、イマージュ化、固定化を意味している。

ベルクソンは再認現象を通して二つの記憶力、身体的記憶力と意識的記憶力、感覚—運動機構と純粋記憶力が結合していることを明らかにしたのだが、それを図式化したのが頂点を下にした円錐体の図形である。過去を表わす底面ＡＢには記憶力に蓄積された記憶の全体が位置しているのに対し、現在を表わす頂点Ｓには身体が位置している。ＡＢは不動であるのに対し、Ｓは絶えず前進し、宇宙についての私の知覚を表わす動く平面Ｐに絶えず接触し、Ｐの一部をなしていて、Ｐを構成する全てのイマージュから発する作用を受け取ったり返したりしている。この二つの記憶力は互いに支持を与えあって緊密に結びついている。一方で過去の記憶力は、感覚—運動機構を任務に導きうる全ての記憶、運動的反応を経験が教える方向に導く全ての記憶を感覚—運動機構に提示する。他方で感覚—運動機構は、無力で無意識な記憶に身体を獲得し、自己を物質化し、現在となる手段を提供する。実際、ある記憶が意識に再現するには、純粋記憶力の高みから行動が遂行される地点にまで降りてこなければならない。個別的なもののみを視界の中に捉える観相的な記憶力と、行動に一般性の印を捺す運動的な記憶力は二つの極限状態であって、正常な生活では両者は切り離されることはなく、互いに内的に浸透しあっている。この二つの流れの合流点に知的な再認や一般観念が生み出される。「通常の自我」

(M.M.,p.181) は二つの極限状態の間を動き、中間的断面によって表わされる位置を順次取るのだとベルクソンは言う。こうした二つの記憶力の調和の堅固さにおいて、「均衡のとれた精神」「生活への完全な適応」「良識」「実践的センス」が成り立つのである (M.M.,p.170)。

それ故、我々の精神生活はSとABの間で無数に反復されるのであり、いずれも同じ円錐体の'A'B、"A"B等の断面で表わされることになる。我々は、感覚—運動的状態から脱して夢想の生活に生きるにつれ、ABへと拡散する傾向を持ち、感覚的刺激に運動的反作用で反応しながら現在の現実に強く執着すればするほど、Sに集中する傾向をもつ。純粋イマージュの方に接近するか、行動の方に傾くかという「精神的態勢」に応じて、あるいは「記憶力の緊張」に応じて、我々の過去の生活全体は無数に反復される (M.M.,p.188)。記憶力が膨張するほど、つまり平面ABに近づくほど、記憶は個人的形式を帯び、その数は増す。記憶力の基底をなす極限の平面では人格的記憶は正確に局限される。記憶力が縮小するほど、つまり頂点Sに近づくほど、記憶は共通な形式を帯び、その数は減る。いくつかの支配的記憶にその他の記憶はもたれかかり、輝く点の周りで曖昧な靄になってしまうからである。こうして我々の記憶は無数の異なった体系化に入り込み、精神生活は様々の調子を帯びることになる。「行動の平面」においては我々は外界の刺激に機械的に反応するだけであり、「夢想の平面」においては放心して様々なイマージュの中を遊ぶだけである。しかし実際には、我々の精神生活は意識の「収縮と拡張の二重運動」(M.M.,p.185) によって、行動の平面と夢想の平面の間を往復している。その時々の状況の必要と個人的努力に応じて、つまり記憶力の緊張の程度によって、我々が身を置く意識の平面は刻々と作られていくのである。この意識の運動こそが「精神」(M.M.,p.192) であり「知性」(M.M.,p.272) なのである。

こうしてベルクソンは知的再認、注意、解釈、観念連合等全ての知的働きを記憶力の緊張によって説明するのだが、この点についてベルクソンは「低い精神生活に関する考察」(M.M.,p.192) だと言っている。我々はここで記憶力を再検討することによって、記憶力と自我の関係について考察することにする。

4 記憶力と自我

ベルクソンは意識的記憶力を独立的記憶力又は自発的記憶力と純粋記憶力に分けて論じているが、この二つの記憶力はどのような関係にあるのだろうか。まず独立的（自発的）記憶力から見てみよう。ベルクソンは「独立的記憶力はイマージュを、それが生じるにつれて時々刻々と寄せ集めていく」(M.M.,p.81)

と述べ、記憶力によって集められたイマージュを「独立的記憶」と言う。「独立的」という言葉は、記憶は脳に保存されておらず〈脳から独立している〉ということを意味していると思われる。では「自発的」とはどういうことか。「自発的記憶」とは〈自発的に生じた記憶〉という意味だと思われる。事実ベルクソンは「現在の記憶と誤った再認」(『精神的エネルギー』所収)で、「記憶は知覚が形成された後で形成されるのではなく、両者は同時に形成される」(E.S.,p.130)と述べ、「知覚がつくられるにつれて、記憶は知覚の脇に、ちょうど物体の影のように描かれる」(ibid.)と述べている。そして続けて次のように言われている。「現在は湧出するとすぐに二つの対称をなす噴出に絶えず二重化し、一方が過去に落ちるのに対し他方は未来に飛んでいく。」(E.S.,pp.130-131)未来に飛んでいくのが知覚であるのに対し、過去に落ちるのが記憶である。そしてこの記憶を次々に蓄積していくのが「自発的記憶力」である。では何故この記憶力は「自発的」と言われるのだろうか。それは記憶が努力によらずに蓄積されるからである。しかし自発的記憶力は自動的記憶力ではない。何故なら、自動的なものは原理的に言って瞬間的なものであるのに対し、この記憶力による記録は「持続のあらゆる瞬間に行なわれる」(M.M.,p.88)からである。そして我々の生涯の全ての出来事がその細部に至るまで記録されるためには、記憶力は新たな現在を求めて絶えず前進しなければならない。記憶力が自発的に未来に向かうからこそ、「過去は自動的に保存される」(P.M.,p.170)のである。記憶力の自発性は記憶力が〈自ら時間に沿って動いていくこと〉を意味している。しかし通常我々はこの時間性を意識していない。それは自発的記憶力の時間性が知覚の時間性の裏面をなしているからであろう。知覚は絶えず行動に向かい、我々を未来へと推し進める。我々の注意は行動に、未来に向かうが、その時記憶力は意識されないけれど刻々と表象を保存しているのである。このような意識の傾向のことを、ベルクソンは「『生者の幻想』と『心霊研究』」で「種の注意」(E.S.,p.77)と言っているが、それは一時的で個人的な注意ではなく、「自然によって強制された万人に共通な恒常的注意」(ibid.)である。そして知覚を生気づけて未来に向かわせるこの「種の注意」のことを「現在の記憶と誤った再認」では「意識の躍動」(E.S.,p.150)とも言い、それは「生命の躍動を表わす」(E.S.,p.152)と言う。知覚は生物の行動力を表現しているのだが、我々が過去の表象を持つことを可能にする自発的記憶力は、この生命活動に付随した一つの能力と言えるだろう。

ところで、自発的記憶力によって蓄積された記憶はその各々が独自に場所と日付を持ち、独特の色合いを帯びた個性的な記憶心像である。しかし我々は過去の表象には関心を持たない。無意識になり、従って潜在的になった記憶が純粋記憶であり、

純粋記憶の全体を保持しているのが純粋記憶力である。従って純粋記憶力は我々の過去一般である。ところで純粋記憶力自体は身体から独立して存在している。これが夢想の平面の純粋記憶力であり、つまりは「魂」なのである。ベルクソンは「純粋記憶は精神の発現である」(M.M.,p.270) と言っているが、この場合の「精神」とは〈独立的実在としての精神〉つまり「魂」のことだと考えるべきであろう。

しかしながら、純粋記憶力は生きている限り身体と結びついて行動に向かう。これが「生活への注意」(M.M.,p.193) である。これは個人によってなされる意志による注意であり、先の「種の注意」に重なって働く。「種の注意」は『物質と記憶力』では「感覚と運動の平衡」に相当するのだが、そこに向かって純粋記憶力はその全体を収縮させて侵入する。こうして過去の記憶全体が現在と結びつくことが「記憶力の緊張」である。記憶力の緊張によって「心理生活」ないし「精神生活」が可能になるのだが、緊張の程度に応じて精神生活は様々な調子を帯びることになる。この精神生活の「調子」を示すものとして、性格や人格があるのではないだろうか。実際、性格とは「過去の我々の全状態の現実的総合」「圧縮された形式における我々の以前の精神生活」(M.M.,p.162) であるが、それは「我々の現在の状態を必然的な仕方で決定することなく条件付ける」(M.M.,p.164) ものである。そして性格の中に集められた経験の全体が、行動に「予見できない形式を刻む」(M.M.,p.192) 場合、つまり独創的で自由な行動を生み出す場合、その精神生活は人格と言われることになる。

ところで、記憶力の緊張には実は二つの運動が含まれている。「十全な記憶力は現在の呼びかけに二つの同時の運動によって答える」(M.M.,p.188) のである。二つの運動とは「前進運動 (translation)」と「回転運動 (rotation)」であるが、「前進運動とは、記憶力の全体が経験に向かって進み、行動のために分割されずに様々な程度で収縮することであり、回転運動とは、記憶力がその時の状況へと方向を取り、最も有益な面をそこに示すこと」である。ここで述べられている記憶力の回転運動とは、先に述べた注意的再認における記憶の物質化のことであり、記憶力の表象化作用、知性を意味していると考えてよいだろう。他方記憶力の前進運動とは行動を引き起こす運動である。では記憶力は行動にどのように関与するのだろうか。ベルクソンは「行動するということは、とりもなおさずこの記憶力が収縮する、と言うより磨ぎ澄まされること、ついには経験にその鋭利な刃を差し出して切り込むまでに至ることに他ならない」(M.M.,pp.116-117) と言っている。従って記憶力の前進運動とは、記憶力が収縮しながら前進することによって全ての過去が不可分のまま現在と結合することであり、この運動によって我々の行動は個性的で人格的なものになるのである。これは意

志を意味していると言ってよいであろう。こうして、現在の呼びかけに同時に答える二つの運動というのは、表象をつくることと行動を司ることになるのだが、これら二つの運動の質を決めるのは、現在の状況によって引き起こされる精神生活の内的な反応つまり感情ではないだろうか。知性と意志の根底には感情があり、感情が観念と行動を方向づけると思われるのである。

ところで、これら二つの記憶力の運動を我々は通常意識していない。我々が普通意識しているのは回転運動の結果生まれる表象だけである。我々の日常生活は表象の連続であり、表象の入れ物として空間と時間を考え、空間を外界に時間を自我に振り分けているが、どちらも同質的な形式に過ぎない。空間は同時性の形式であり、時間は継起の形式である。では表象の継起が何故自我に基づけられるのかというと、自我が過去の表象の系列を刻々と終わらせ、表象を未来の行動に変える動く先端に位置しているからである。言い換えれば知覚が行動に、現在が未来に前進する「種の注意」、「意識の躍動」つまり「知覚の推進力」が表面的自我の時間であり、その時間が同質的時間であるのは、時間を満たすのが相互外在的な表象だからである。

このように、「表面的自我」においては、判明な知覚が連続して継起する同質的時間を我々は生きているのであり、それを可能にするのは回転運動の自己空間化作用なのであるが、同時に自我の内部においては純粋持続が流れているのだと『試論』では述べられている。ではこの純粋持続はどこに見いだされるのだろうか。それは記憶力の前進運動にあると我々は考える。我々の行動は、記憶力が過去の全てをともなって現在に突進することによって成立する。行動においては持続の流れは連続的であり、行動は先立つものから独自の発展によって出てくる。ベルクソンは「我々が行動するのを見ている持続、我々が自己を見るのが有益な持続は、諸要素が分離し並置される持続であるが、我々が行動している持続は、諸状態が互いに溶け合う持続である」(M.M.,p.207) と述べている。こうして我々は自我の根底においては純粋持続を生きているのだが、通常は我々は外界に注意を向けているので、純粋持続を意識することはない。では純粋持続に再び身を置くにはどうしたらよいのだろうか。我々は一挙に表象から行動に行かなければならないだろう。出来上がったものを外から捉えるのではなく、出来つつあるものを内から捉えなければならないだろう。このことを『創造的進化』では「見る能力が振り返り、自己の上に身をよじって意志する働きと一つになること」(E.C.,p.238) と表現している。ここでは見ることと行動することが一つになっている。これが自我に対する自我の直観である。直観とは「思考の働きの習慣的方向を逆転すること」(P.M.,p.214) であり、それは一挙に獲得されなければならない。

ところで純粋持続には程度があるのだが、それは記憶力の緊張の程度に対応している。より詳細な人格的記憶が展開する広大な平面に身を置くほど、純粋持続はより豊かな個性を帯び、より強く未来に突進して、より独創的な現在を創造する。つまりより自由になる。ベルクソンは『試論』で、「行為はそれが結びつく動的系列が根本的自我と同一化する傾向を増すほど、それだけ自由になる」(D.I.,p.126) と言っているのだが、その意味がここで明らかになる。「動的系列」とは記憶力の前進運動、言い換えれば純粋持続であり、「根本的自我」とは記憶力の根底をなす最大の純粋記憶力、夢想の平面のことである。純粋持続が根本的自我と一致するほど、つまり記憶力の緊張が高まって純粋記憶力の平面と結びつくほど、我々は自由になる。ここでは直観は次第に強化されることになる。

5 おわりに

我々は最後に『試論』の二つの自我について整理しておきたい。『試論』では自我は、意識事実が「漠然とした多」として現れる「深い自我」と、「判明な多」として現れる「表面的自我」に区別され、それぞれが「質の時間」と「量の時間」によって担われていた (D.I.,p.96)。そして、一方の自我は他方の自我の「外的投影」「空間的で社会的な表象」とされた (D.I.,p.172)。従って、『試論』の二つの自我は『物質と記憶力』の「夢想の平面」と「行動の平面」を意味しているのではない。確かに「夢想の平面」と「行動の平面」は「魂」と「身体」という自我の二面であるのだが、それらは自我の構造上の二面、自我を可能にする存在論的な二面である。しかし『試論』で問題になっているのは、「具体的で生きている自我」(D.I.,p.104) である。それは「夢想の平面」と「行動の平面」が相互浸透している中間の平面、記憶力の緊張によって生じる「通常の自我」における二面である。ではそこにおける「深い自我」とは何か。それは独自の調子をもつ精神生活であり、そこから発する前進運動であろう。記憶の全ては相互浸透して一つの傾向に集約され、人格を表わす行為に結実する。これが自由である。では「表面的自我」とは何か。それは回転運動によって生じた判明な知覚や観念であり、理性的に選ばれた行動であろう。従って、「深い自我」は「直接に見られた意識生活」(D.I.,p.102) であり、純粋持続において展開されるのに対し、「表面的自我」は「空間という屈折を通して見られた意識生活」(ibid.) であり、同質的時間つまり空間において展開されることになるのである。こうして、通常の自我には「二つの様態」が区別されるのだが、我々は大抵ははっきり区別された意識事実の中で生きている。その時「深い自我」は知覚の背後に閉ざされてしまい、純粋持続は働いていても意識されなくなる。もし我々が注意を自己の

内部に向け、行動している自我を直接捉えることができるなら、その時には自我の全体が現在に結びつき、現在を創造するのがわかるだろう。こうしてひとたび純粋持続に身を置き、内的自我を捉えたならば、我々は更に自我を収縮することによって魂の奥深くに入り込み、根源的自我、さらには自我の源にまで遡ることができるようになるであろう。ここに我々は、『道徳と宗教の二源泉』の「閉じた魂」と「開いた魂」の区別を見ることができるのである。

注

拙論で用いたベルクソンの著作は次の通りであり、参照箇所は本分中に略字で記した。

Essai sur les données immédiates de la conscience, P.U.F.,1970.（D.I.と略）

Matière et mémoire, P.U.F.,1968.（M.M.と略）

L' évolution créatrice, P.U.F.,1969.（E.C.と略）

L' énergie spirituelle, P.U.F.,1967.（E.S.と略）

La pensée et le mouvant, P.U.F.,1969.（P.M.と略）

Les deux sources de la morale et de la religion, P.U.F.,1969.

（いとうよしこ　大学院博士後期課程・哲学哲学史）